

『今月の天候と農作業』

通巻第5571号
9月号
平成26年 8月 28日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	30	40
降水量	九州南部	40	40	20
日照時間	九州南部	30	40	30

【概要】

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 8月30日(土)～9月5日(金)

高気圧に覆われ、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 9月6日(土)～9月12日(金)

高気圧に覆われ平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 9月13日(土)～9月26日(金)

高気圧に覆われ平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆ 普通期水稻

1 病害虫防除

「トビイロウンカ」は坪枯れを起こすため予察情報をもとに、ほ場ごとに株元を十分観察し防除しましょう。「穂いもち」は、山間地や葉色の濃い水田では激発しやすいので、遅れないよう防除します。「カメムシ」加害による斑点米で、品質低下が発生します。防除は穂揃期とその7～10日後の2回は基本ですが、その後も発生に注意します。

2 水管理

「ヒノヒカリ」「おてんとそだち」は登熟中にありますが、根の活力を保ち充実の良い玄米生産のために、収穫の5日前迄は間断かん水を続けます。晩生種の「まいひかり」は、出穂して間もないため湛水状態を保ちます。

台風時は深水とし倒伏軽減を図ります。台風通過後も吹き返しの乾燥風で玄米の登熟障害が起こる場合があるので、風が止むまでは湛水を保ちます。倒伏すると穂発芽しやすいので、排水し穂先を隣の株の上に乗せるなどします。

◆ 大豆

湿害防止のため、排水対策を徹底します。開花期以降は「紫斑病」や「カメムシ」の防除を行います。「ハスモンヨトウ」は老齢幼虫になると薬剤防除効果も劣るので、観察に努め早めに防除を行います。孵化後間もない幼虫が食害した際に発生する白く透けた葉を見つけたら、幼虫が周囲に広がる前に処分することも効果的です。

◆ そば

そばは湿害には弱く、長時間帯水や冠水すると生育不良や立枯れが発生するので、排水溝を設け生育期間中は、徹底した排水を行きましょう。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

施設野菜ではきゅうりを始め、ピーマン、トマト、いちごなどの定植が始

まります。育苗期の後半は、鉢ずらしを行い、がっちりした苗に仕上げます。鉢ずらし後は乾燥しやすいので、かん水不足に注意します。

また、これらの苗は適期に定植することが重要です。台風や降雨の多い時期となるため、ハウスの定植準備は計画的に余裕をもって行います。

定植前のかん水は、定植の5～7日前にかん水チューブを利用し、畦全体が湿るように十分行います。定植前には根が深く伸長するよう植え穴に十分かん水を行い、定植後は活着促進を図るため株元を中心にかん水することが重要となります。なお、定植前のかん水量が不足していると根張りが不十分となり生育や収量に大きく影響しますので、中期展張ハウス等の周年ビニルが被覆されているほ場では注意が必要となります。

◆ きゅうり

ハウス抑制栽培の定植期となりますが、定植後から収穫開始期までの管理により草姿は決まります。根を十分に張らせコンパクトな草姿に上げることが、収量、品質向上につながりますので、定植後は株元中心の手かん水を行い、活着後はかん水を控えて徒長しないよう草勢の調節を行います。また、定植の早いものは、主枝の摘心期となりますが、摘心1週間前には1回目の追肥を行い、初期の草勢維持を図ります。

◆ ピーマン

接木栽培のピーマンは、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向がありますので、通常（12ポット苗）よりも2週間程度早めに定植を行います。かん水についても定植後から収穫開始時期までかん水量を3～4割増やすなど草勢を強めに保つことが必要となります。

◆ トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトの定植期となりますが、セル苗を2次育苗せず直接定植するダイレクトセル苗定植が増えてきています。異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、定植後にかん水量を制限する管理が行われていますが、極端な水切りは初期生育に悪い影響を及ぼしますので、少なめのかん水量で回数を多く施用するようにします。

◆ いちご

さがほのかは、花芽分化に対する窒素濃度や苗令の影響等が少なく、花芽分化が揃って早いのが特徴です。

ポット苗の花芽分化期は9月10日頃であるので、その2～3日前から顕鏡を行います。花芽の確認後、9月中旬以降に定植します。

なお、定植は採苗が早く育苗期間の長い苗から順番に行い、炭疽病等の恐

れのある苗は除去します。

(黒木正晶)

葉茎根菜類・いも類

9月はキャベツ、はくさい、ほうれんそうなどの葉菜類やだいこん、水田ごぼうなどの根菜類のは種や定植期となります。水はけの良い、地力の高いほ場を選び、植え付け時に適度なかん水を行い初期生育を促すことが重要です。

生育初期にネキリムシ等の被害を受けやすく、蝶目害虫や甲虫類の食害や雑草の発生も多いので防除対策は重要です。

◆ にんじん

にんじんは間引きの時期を迎えます。株間は8割程度を目安に年内出荷はやや広めに、年明け出荷はやや狭くして有効株数を確保し収量アップを図ります。干ばつによる発芽不良や大雨による土壌や種子の流失で欠株が多い場合は、まき直しを行いますが、地域によりやや差はありますが遅くても20日頃までがは種期の限界となります。

◆ ほうれんそう

加工用のほうれんそうは下旬頃より播種適期となります。大柄に生育させるためには、排水の良い、肥沃なほ場を選定します。土壌酸度は石灰資材を施用してpH7を目標に調整します。播種後除草剤を処理しますが、土壌が乾燥しすぎて除草剤の効果が劣る場合が見られるので、播種前に適度なかん水を行い、適湿の状態除草剤は散布します。

◆ 食用かんしょ

普通堀の収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなります。鱗翅目幼虫(ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等)が多発しやすいので、収穫予定日を考慮して農薬防除を行います。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

極早生温州みかんの収穫が始まります。収穫は、樹上選果を行いながら、着色や果汁成分など、地域の基準に基づいた出荷を行きましょう。

収穫後は、樹勢回復のための施肥やかん水、葉面散布が必要となります。収穫が早い園では、秋期の高温の影響で、収穫後に秋枝が発生し、翌年の着花に悪影響を及ぼす事があります。9月中旬までに収穫を終える園地では、10月以降、秋枝が発芽しなくなった時点でマルチの除去やかん水などを実施しましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は、6月下旬の花がわずかに結実し、その後は7月下旬と8月の花が結実している園が多く見られます。良好な初期肥大を確保するため、9月末までに摘果を終了しましょう。

夜温が早く低下する中山間地域や、結実が遅く果実肥大が遅れている園地では、9月下旬から10月上旬にビニル被覆を行い、昼間の高温管理と夜間の加温（外気温よりも3度程度高い温度）により、肥大を確保しましょう。

◆ マンゴー

9月になると、日射量は真夏の4分の3程度になり、枝の緑化には不利な条件になるので、内カーテンや遮光カーテンを開放し、十分な日照を確保しましょう。剪定が遅く、枝の緑化が遅れている園地では、加温や葉面散布により、緑化を早めましょう。

ヒートポンプにより秋季の夜冷を行う場合は、夜間の施設内温度が15度以下に下げられる時期になってから冷房を開始しましょう。ハウスの条件やその年の気温によって変わりますが、9月終わりから10月の上旬が標準の冷房開始時期となります。

2 落葉果樹

◆ くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。

収穫・出荷に当たっては、早朝に収穫することで、品温を低く保ち鮮度保持を図りましょう。また、家庭選別を徹底し、実炭そ病や果実害虫の被害果の混入を防止しましょう。

(山口和典)

花き

◆秋ギク

「神馬66-4」の10月出荷作型の再電照は総苞りん片形成後期から4日間実施します。目安として消灯後12～14日後ですが、地域や当年の気候で変動がありますので、農業改良普及センターまたはJAにおいて「花芽分化の検鏡」を必ず行った上で実施してください。

直挿しする穂は、低温伸長性を高め、節間伸長や生育の揃いを良くするために2～4度で穂冷蔵を行います。「神馬」系統は穂冷蔵を長期間実施すると、直挿し後の腐敗が多発したり、開花遅延が発生しますので、冷蔵期間は3週間程度に留めましょう。

「神馬66-4」は、高温の影響を受けると従来の「神馬系統」よりも腋芽が出にくい特性があります。9月以降も残暑が続きますので、必要に応じてBA剤の散布を行うとともに、親株ほ場はできるだけ涼しくなるよう管理してください。

◆スイートピー

冷蔵が終了した種子は、活着不良を避けるために遅くとも出庫後3日までは植え付けましょう。また植え付けから1週間は、乾燥しないように綿密な水管理を行ない、その後は徐々にかん水間隔を広げて根の張りを良くしてください。1ヶ月程度は、ベッド全体が十分湿るようなかん水を行ってください。

植え付け時期の遮光は植え付け前から実施し、植え付け後7～10日は寒冷紗で終日遮光し、その後は天候に応じた遮光を行って下さい。長期の遮光は軟弱徒長となりますので、生育を見ながら除去します。

◆デルフィニウム

沿海地域の年内出荷作型の定植期になります。早期抽だいを防ぐために定植前に寒冷紗等で遮光すると共に十分にかん水を行って下さい。

中山間地域で8月に定植した作型では伸長時期から抽だい時期になります。定植から抽だい後2週間ぐらいまでは定期的に液肥を施用します。また必要に応じてカルシウム資材の葉面散布を行ってください。

◆ホオズキ

白絹病やその他の立ち枯れ病、ウイルスが発生したほ場では、出来る限り残渣をほ場外に持ち出して焼却し、ほ場に残った細かな残渣については、堆肥を散布し、耕うんの繰り返しと適湿な土壌水分管理で十分な腐熟を行います。

しょう。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

今月は夏から秋に変わる季節の変わり目で、気温の日格差が大きくなる時期です。また、台風の影響も予想されるため十分な対策が必要となります。さらに、暑熱の影響による受胎成績の低下も、この時期にできることから、暑さで体力の落ちた家畜の回復を図るようにしましょう。昼は、畜舎の風の通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かし、暑さ対策を行いますが、夜間は急に気温が下がるので、気温差で家畜が体調を崩さないように温度管理を十分に行いましょう。

乳牛に関しては、ヒートストレスメーターの温湿度指数（THI）を毎日チェックし、THI値が67以上の場合、牛舎ファンを常に回し、牛体に風が当たるよう暑熱対策をしっかりと行います。夜間はTHI値のチェックしながら対策を行いましょう。また、水については、新鮮な水を飲めるようにしてください。

豚では、夏期の暑熱による受胎率の低下がみられる時期になりますので、交配期の豚の体調管理と観察を徹底し、受胎成績の改善を図りましょう。また、気温の日格差が広がる季節は、豚や鶏の病気が発生しやすい時期ですので、観察を徹底して疾病の早期発見に努め、早めの対策を行いましょう。

◆ 飼料作物

牛の粗飼料では、台風の影響が危惧されますが、天候にあわせた収穫作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。また、年内収穫のエン麦の作付け時期にもなりますので、計画的な作付け作業を行いましょう。

◆ 家畜防疫対策

韓国では、口蹄疫の発生が見られています。引き続き家畜防疫の徹底をお願いします。

(三角 久志)

特用作物

◆ 茶

これからの作業は、来年の一番茶の収量・品質の確保のために大変重要となりますので、こまめに茶園を巡回し管理を徹底しましょう。

1 秋肥の施用と土づくり

秋肥の施用時期が遅れると、耐寒性が低下し秋冬期の急激な低温により、寒害(幹割れ、越冬芽の凍害等)を受けやすくなりますので、9月上旬までには施用しましょう。また、土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに堆肥を1～2ト施用し深耕を行い、土づくりと発根促進による肥効率の向上に努めて下さい

2 病害虫の防除

秋芽が硬化していない茶園では、連続した降雨等により葉の濡れ時間が長くなると炭疽病やもち病が多発生しますので、一葉期頃に予防効果の高い薬剤を、三葉期頃に治療効果の高い薬剤を散布します。また、秋期に多発生するチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ等の吸汁性害虫やハマキムシ類もしっかりと防除しましょう。

県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。この害虫は、成虫が茶園を飛び回りますので、茶園を良く観察してください。なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡してください。

(佐藤邦彦)

◆ しいたけ

1 原基(げんき)づくり

9月から10月は、しいたけのもととなる原基の形成が盛んな時期で、今後のしいたけ発生量に大きく影響します。原基の形成促進のため、光の確保に加え、十分に散水を行いましょ。特に古ほだ木は、天地返しやほだ回しを併せて行うとより効果的です。

2 ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場には、南～東南斜面の日光がチラチラ差し込む林内や、風当たりが弱く比較的湿気が多いところなどが適しています。スギやヒノキ林のほだ場では、間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい環境にしましょう。また、従来からのほだ場を使用する場合は、害菌による被害木や古ほだ木を撤去しましょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月の作業は、通常期販売に向けての出荷規格の確認と来年作に向けた準備が主な作業となります。

1 出荷前には必ず最終確認として、異物・異臭・水分の確認と土砂付着や腐れ等の手入不足がないか出荷包の確認を行いましょう。

また、普通系に色損系（グレー葉・汚れ葉等）が混入していないかの確認もあわせて行い、混入している場合は、ピッキングを行いましょう。

貯蔵害虫については、成虫や食害痕、排泄物がないか確認を行いましょう。発生を確認した場合は、速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行ってください。

確認作業は、晴天日に行い、吸湿による品質低下に注意しましょう。

2 良質葉を生産するには、栽培環境の良い、病害発生のおそれがないほ地が必要となりますので、たばこ作に適したほ地選定と確保に努めましょう。

3 病害の耕種的防除の徹底を図る為にも夏期深耕を3回以上行い、立枯病等、土壌中の病原菌密度低減や土作りに努めましょう。

4 良質堆肥10畝当たり1200キ以上の使用へ向けて、堆肥の材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りましょう

(井上 馨)

内容の詳細について

9月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	穂いもち ※ 紋枯病	並 やや少	葉いもちの発生状況は、発生面積率、程度ともに平年並の状況です。8/6に防除情報を発表しています。 穂ばらみ期以降は稲体の抵抗性が弱まり、紋枯病が上位葉鞘へ進展しやすいので、発生程度の高いほ場は注意が必要です。
	トビイロウカ ※※ (秋ウカ) 斑点米カメムシ類	やや多 やや少	トビイロウカの生息数が高まっており、8/15に注意報を発表しています。増殖率の高い短翅型雌成虫数がやや多く確認されているためほ場全体の発生状況の把握に努めるとともに、成虫・幼虫ともに生息している株元まで十分農薬が到達するように防除します。 斑点米カメムシ類は、穂揃期とその7～10日後の2回防除が基本です。残存虫が多い場合は収穫前使用日数等に注意して追加防除します。
大豆及び野菜類	ハスモンヨトウ等チョウ目 (鱗翅目)害虫	やや少	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなりますので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止します。
施設果菜類	ウイルス媒介虫 (アブラムシ類、アザミウマ類等)	—	ウイルス病は生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。アブラムシ類やアザミウマ類などは種々のウイルス病を媒介しますので、施設開口部への防虫ネット設置や定植時の粒剤施用などの防除を徹底します。
	タバココナジラミ類	—	県内ほぼ全域で、各種薬剤に対して感受性の低い(薬剤の効きにくい)バリエイタイプQが、優先して発生していることが確認されています。薬剤のみでは防除が困難ですので、防虫ネットや粘着板等を組み合わせた総合的な防除対策に努めます。
	キュウリ黄化えそ病 (MYSV)	—	シキイロアザミウマによって媒介されるキュウリ黄化えそ病(MYSV)が、一部地域で確認され、拡大していることから注意が必要です。
促成いちご	炭疽病	—	罹病苗の持ち込みは、本ほ内での感染源となるため健全苗のみ定植します。苗床で発病した苗に隣接している苗(半径3ポット程度)は、感染苗と見なし廃棄します。 苗からの持ち込みによる「うどんこ病」や「ハダニ」の発生が多く見られるので、定植前に防除を徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	うんしゅうみかんでは、着色期の加害は落果を生じやすいので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	かいよう病 黒点病 ※	やや少 やや多	かいよう病は、台風等による枝葉の損傷等により発病が助長されます。薬剤は、事後より事前に予防的に散布する方が効果的です。 黒点病の発生が多くなっており7/25に防除情報を発表しています。降水量が少なくても1ヶ月毎の防除を実施します。
	カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ	やや多 並	カンザワハダニは、平年よりやや多の発生です。寄生葉率30%または1葉あたり虫数0.5～1頭の発生初期に防除を行います。
茶	炭疽病 もち病 輪斑病	並 並 並	炭疽病は、秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2～3回防除します。もち病は、中山間地での発生を確認しています。 輪斑病は新梢枯死症の原因となりますので、輪斑病の多発ほ場では秋芽の萌芽期～2葉期に防除を行います。
	カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノボリガ チャノキイロアザミウマ※ チャノミドリヒメヨコハライ クワシロカイガラムシ	並 並 並 やや多 やや多 並 並	カンザワハダニは、低密度での防除に努めるとともに、薬剤感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノボリガは例年9月以降に増加し、また、この時期は秋芽の伸長期であるので、今後の発生に注意します。 チャノキイロアザミウマのこの時期の発生は、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には農薬がかかりにくく防除効果があがらないので、残効性の長い農薬か1週間間隔での連続散布を行います。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
2) ※※は注意報、※は防除情報を発表中です。詳しくはホームページをご覧ください。病害虫防除・肥料検査センターホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。